

2021年3月7日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 123 : 1～2

ルカによる福音書 12 : 35～40

「目を覚ましている僕」

<神の国を求めなさい>

先週の聖書箇所は、イエスさまが弟子たちに、「命や体のことで思い悩むな」、「神の国を求めなさい」、ということ語られたところでした。

天と地と、すべての命の造り主であり、命を支えて下さる方であり、雀も、鳥も、野の花も大切に顧みて、慈しんで、養っておられる神さまが、あなたがたの父である。だから、あなたがたが父なる神さまに養い守って頂けるのは当然なのだ。だから、日々の思い悩みは父なる神さまにお委ねして、信頼して、安心して歩みなさい。だから、あなたがたはまず、神の国、つまり、神さまのご支配の中に生きること、神さまの大きな御手の中で、神さまとの親しい関係の中で生かされる、そのことを何より一番に求めなさい。

イエスさまは、創造主であり全能の神を、何度も「あなたがたの父」と言って、あなたがたは天の神さまの愛する子どもなのだと言って、そう語りかけて下さったのです。

そして、わたしたちが、父なる神さまにすべて依り頼んで、思い悩みを委ねて歩いていくならば、わたしたちは「富を天に積む」という生き方をしていくことが出来る。自分で自分を養うために、富を地上に蓄えるのではなくて、与えられた命を、賜物を、神さまに喜ばれることのために、自由に用いていくことが出来る。そういう生き方が出来るのだと、教えられたのでした。

このような、弟子たちへの「神の国を求めなさい」という教えに続いて、今日のところでは、その弟子たちの生きる姿勢について。弟子たちが、何に向かって、どのように生きるべきかについて、イエスさまは教えられたのです。

<イエスさまの再臨>

さて、今日の箇所の最後の40節を見てみると、「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」とあります。

「人の子」とは、イエスさまご自身のことです。イエスさまは、「わたしは思いがけない時に来るから、用意していなさい」と弟子たちに語っておられます。

でもイエスさまはこの時、弟子たちの目の前におられるのに、何か変なことを仰っているな、と思われるかも知れません。ここでイエスさまが、御自分が思いがけない時に来る、と

仰っているのは、これから先のこと。つまり、十字架に架けられて死に、そして復活し、天に上げられてから、その後、再び来られる日のことです。この世の終わりの日のことです。

イエスさまはルカによる福音書のこれまでの所でも、御自分が苦しみを受けて殺された後に、復活するとの予告をされ、また天に上げられる時が来る、と語っておられました。

そして、ルカによる福音書の最後の 24 章にも、また著者であるルカが、この福音書の続き、第二巻として書いた使徒言行録という書物にも、復活のイエスさまが実際に天に上げられた、ということが語られています。

また、使徒言行録には、再び来るという約束がはっきりと語られています。使徒言行録の 1：9～11 を読んでみましょう。お聞きください。

— こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」 —

こうして復活のイエスさまが天に上げられた後、神さまは信じる人々に聖霊を遣わして下さいました。今のわたしたちもまた、聖霊にあって、天におられるイエスさまが、いつも共にいて下さいます。しかし、復活のその体、生きておられるそのお姿を、直接この目で見ることは、今のわたしたちにはできません。

この復活のイエスさまが、栄光に包まれて、いつか再びおいでになる。わたしたちの目の前に立って下さり、直接見え、すべての救いが明らかにされ、神のご支配が完成する日が来る。それが、イエスさまを信じる者たちに約束されていることです。

この、イエスさまの再臨を待つことは、教会のとても大切な信仰の一つなのです。

このイエスさまの再臨の日は、「神の国の完成」、とも言われます。

神の国とは、神のご支配、という意味です。それは、神さまの御子イエスさまが地上に来て下さり、救いの御業を成し遂げて下さったことによって、すでに実現し、始まっています。今、わたしたちも救いにあずかり、確かに神さまのご支配の中にいる、とすることが出来ます。しかし、神の国はまだ、完成してはいません。わたしたち教会は、神の国の「すでに」と「未だ」の、中間の時を歩んでいるのです。

世の中には、まだこの神さまのご支配を受け入れていない人々がいます。まだ神さまのご支配を宣べ伝えられていない人々がいます。また、イエスさまによって罪を赦されたにも関わらず、わたしたちの中では未だに罪の力がくすぶっていたり、サタンの誘惑があったり、弱さやつまずきが、わたしたちを捕らえようとしています。死は、聖書では「最後の敵」と言われています。

しかし、わたしたちは、イエスさまが十字架と復活の御業によって、すでにこれらに勝利して下さったことを知らされています。そして、このイエスさまによって始まった神のご支

配は、確実に神さまのご計画に従って、完成の日を迎えるのです。

やがて終わりの日、イエスさまが再び来られる日には、イエスさまの勝利が明らかになり、罪も死も悪も完全に滅ぼされ、神さまの恵みのご支配がすべてのものに及び、完成します。

ですから教会は、神の国の完成を、期待して、希望を持って、待ち望みます。その日まで、神さまのご計画に従いながら、一人でも多くの人々に福音を宣べ伝えながら、再び来られるイエスさまを、待っているのです。

「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」イエスさまのこの御言葉は、そうしてイエスさまを待つわたしたちの姿勢を教えるものなのです。

しかしここで、わたしたちにとって難しいのは、それがいつ来るかが分からないことです。イエスさまは「思いがけない時に来る」と仰っています。だから、いつ来ても良いように、いつも備えていなさい。それが、イエスさまの今日の御言葉なのです。

<目を覚まして用意する>

まず最初に、35節には「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。」とあります。

ユダヤ人の普段の服装は、長くゆったりした一枚着のようなものです。これに、外出の時や、さて仕事をしよう、という時には、腰に帯を締めるのです。

また、ともし火をともしていなさい。これも、暗くなっても、夜でも、いつでも働けるように、用意を整えていることを意味します。

そして、最初のたとえが語られます。「主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」

ここでは、イエスさまが主人で、弟子たちは外出中の主人の留守を守っている僕たちにたとえられています。

主人は婚宴に出かけています。当時の婚宴は、今の披露宴のように、結婚式の後に数時間だけ行われるようなものではありません。1～2週間にわたって宴会が開かれ、村の人たちが好きに出たり入ったりして飲み食いするものだったそうです。つまり、婚宴に出かけた主人の帰りは、今日の夜かも知れないし、数週間後かも知れないのです。その帰りがいつになるか、全く分からない。その中で僕たちは、主人がいつ帰ってきても良いように、戸をたたかれたら、すぐに開けることが出来るように、用意を整えて待つのです。

38節には「主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」とあります。主人の帰りの時間もまた、真夜中か、夜明けか、真昼間なのか分かりません。そんな中で、主人が帰った時に、眠っていたり、油断して怠けているところを見られるのではなく、いつでも主人を迎えられるように、目を覚まして、きちんと用意を整えて待っている僕たちは、それを見た主人に喜んでもらえる。それは幸いだ、とされているのです。

もう一つの 39 節以下のたとえば、今度はイエスさまが泥棒で、弟子たちが家の主人にたとえられています。泥棒は、家の主人に知られないように、こっそり、家に入ろうとします。何日、何時に盗みにいきます、なんて予告を出すのは、ルパン三世か怪盗キッドくらいのもので、泥棒がいつやってくるかを知っていたら、主人は自分の家に押し入らせないように、しっかり備えをして、迎え撃つ準備をしましょう。しかし、泥棒は予告なんてしないのだから、いつも備えていなければならないのだ。そういうたとえです。

腰の帯を締め、ともし火をともし、いつでも主人を迎える準備をしている。いつ泥棒が来ても大丈夫なように、常に構えている。この緊張感。この態度。これが、弟子たち、わたしたちが、イエスさまが天から再び来られるのを待つ姿勢であると、教えられているのです。

<僕として>

しかし、なぜイエスさまは「目を覚ましていなさい」「用意していなさい」ということを、何度も言われるのでしょうか。

それは、わたしたちがすぐに眠りこけてしまうからです。来たるべき時がいつか分からない、というのは、時間がたつにつれて、わたしたちに気の緩みを起こさせ、緊張感を失わせていくからです。

イエスさまが再び来られるその時を、わたしたちは知ること、予想することも出来ません。イエスさまが天に昇られた直後の、生まれたての教会に連なった人々は、比較的すぐに、自分が生きている間にでも、イエスさまが再び来られると思っていたかも知れません。でも、それからもう 2000 年も経ちました。わたしたちもまた、イエスさまが来られる前に、この地上の命を終えて召されるかも知れません。再臨の日は、今日からさらに 2000 年後かも知れません。でも一方で、もしかしたら、その日は今夜かも知れないのです。本当に。

いつか来るか分からない日のために、心構えをしたり、備えをしたり、緊張感を保って、ずっと待っているということは、とても難しいことです。ずっと緊張しているのは疲れるし、心も体も持たないな、とってしまします。出来ることなら、大体の時を教えてもらって、あるいは予想して、それに向けて計画を立て、自分のペースで備えていけたら楽ちんです。仮に 10 年先なら、今はまだ緊張しなくていいかも知れません。終わりの日まで、あと 1～2 年になってきたら、本腰を入れたらよいでしょう。

でもそれは、まことに自己中心的な計画です。自分の都合に、神さまの方が合わせて頂きたいと思っているのです。それではまるで、自分が主人で、神さまが僕のようなものです。それは、とっても傲慢な考えです。それに、救いのご計画は、神さまのご計画であり、神さまがお決めになり、神さまが実行され、神さまが完成させて下さるものなのです。自分の命の長ささえ決められないわたしたちが、命の造り主であり、すべての支配者である神さまの救いのご計画に、口出しすることなど出来ません。

ですから、わたしたちは、神さまの大きな救いのご計画に、わたしたち自身を合わせるべきなのです。わたしたちが生まれる遙か前から始まり、わたしたちの人生を包み込み、そして、わたしたちの死の向こうまで続いている神さまの大きな救いのご計画を、わたしたちも共に見つめ、それに従って歩いていくべきなのです。

神さまは、イエスさまを通して、聖書を通して、わたしたちのそのご計画があることを知らせて下さっています。いつか必ず、神の国の完成の日が来ること、イエスさまが再び来られることを示して下さいます。その神さまの時を、わたしたちが知ることは出来ません。しかし、それは、神さまの最も良い時に、最も良い方法でなされます。それを、わたしたちは信頼して、期待して、用意して、待っているべきなのです。

わたしたちはいつでも、主人の帰りを待っている僕です。イエスさまが主人で、弟子たち、わたしたちは僕なのです。造り主は神さまであり、わたしたちは造られた者なのです。このことを、忘れてはいけません。

<仕えて下さる主人>

しかし、予定が分からなくても、わたしたちが熱心に主人を待ち続けることが出来るか。わたしたちが、どんな心持ちで、主人の帰りを待つことが出来るか。そのことは、その主人がどういうお方であるか、ということに掛かっているのではないのでしょうか。

いつ帰ってくるか分からない主人が、もし横暴で、我が儘で、いつも僕たちを虐待し、軽んじるような主人であったなら。主人が居ないその時は、僕たちにとって休息の時であり、このまま帰って来なければいいのに、とさえ思うでしょう。また、帰りを迎える準備も、怒鳴られないように、機嫌を損ねないように、怯えながら用意をして、帰りが一日でも遅くなるようにと願うでしょう。

しかし、イエスさまは、御自分がどのような主人であるかを、37 節の後半で語られました。「はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」

この主人は帰って来たら、自分が腰に帯を締めて、僕たちを食事の席に着かせ、側に来て、給仕して下さいます。主人が、僕たちに仕え、もてなし、喜ばせて下さるといなのです。この僕たちは、この主人にどれだけ愛され、大切にされ、重んじられているのでしょうか。これは、普通の主人と僕の関係では有り得ないことです。

しかし、イエスさまはそのような主人なのです。これは、イエスさまの約束です。わたしが再び来た時には、目を覚まして待っていたあなたたちを喜び、あなたたちのために食卓を整えよう。あなたたちの側に付いて、大いにもてなしてあげよう。こんな風に言って下さる方が、わたしたちの主人なのです。

そうであるならば、この主人が出かけている間、僕たちは、一日も早くこの主人に帰って

きて欲しいと願っているのではないのでしょうか。お帰りが待ち遠しくて、仕方がないのではないのでしょうか。

そして、僕が本当にこの主人を慕い、愛しているならば、帰ってきて戸をたたかれたら、一秒も待たせることなく、すぐに戸を開いて差し上げたい。何なら戸の前に立った瞬間に、自動ドアみたいに開いてあげたい。暗い時間であれば、すぐに灯りを照らして、不自由のないように、お手伝いをして差し上げたい。どうしたら喜んで頂けるだろうか。何をすればお褒めに与れるだろうか。そんな風に、主人が喜んで下さることを考えて、精一杯、出来る限りの準備を整えるのではないのでしょうか。腰の帯を締めて、ともし火をともし、今か、今かと、帰りをお待ちするのではないのでしょうか。そのための準備は、決して苦ではなく、喜んで、出来る限りのことをしようと思えるのではないのでしょうか。

イエスさまが再び来られる日を、わたしたちが目を覚まして、希望を持って、心から楽しみにしつつ、精一杯の用意をしながら待つことが出来るのは、イエスさまが、給仕をして下さるほどにわたしたちを愛し、重んじ、大切に下さる主人だからなのです。

わたしたち、僕たちの、待つ時間も、心の思いも、真剣な態度も、この良い主人の愛によって支えられているのです。わたしたちの主人は、お帰りを心待ちに待つことが出来るようなお方なのです。

今、わたしたちは、この主人の帰りを、どのような気持ちで待っているのでしょうか。来られる日を、本当に期待して、今か今かと待ち焦がれているのでしょうか。喜んでいただけるように、精一杯のお迎えをする準備が出来ているのでしょうか。他の思い悩みに気を取られて、主人のことが後回しになっていませんか。気が緩んで、眠たくなっていますか。イエスさまのことが、心の一番の思いになっているのでしょうか。

<神の国の食卓>

目を覚ましている僕でいたいと願いつつ、弱く、思い悩みの多い弟子たち、わたしたちです。しかし、イエスさまは、そのようなわたしたちのために、聖餐を定めて下さいました。

今日は、本当は第一主日で聖餐にあずかる日でしたが、感染予防のために見送らざるを得なかったのは、とても残念なことです。

聖餐は、イエスさまの救いを信じ、告白した者。つまり、イエスさまに従う弟子となった者に与えられます。イエスさまは、パンと杯という「しるし」を通して、イエスさまの十字架の血で、わたしたちの罪が確かに贖われていること。イエスさまの体と一つにされていること。そして終わりの日、イエスさまが再び来られた時に、このようにして天の国の食卓にあなたは招かれるのだということを、少しばかり先取りして、聖霊のお働きによって、弟子たちに、わたしたちに味わわせて下さっているのです。

聖餐の度ごとに、わたしたちは救いを確かにされ、天の食卓の約束を確かにされます。そうしてまた、心を新たにされて、イエスさまを待ち続ける力を与えられるのです。

この主人を知っているわたしたちは、幸いです。この主人の帰りを、目を覚まして、喜んでお迎えできる僕たちは、幸いです。そしてわたしたちもまた、その幸いに与ることが出来るのです。

ご自分の命を捨てても、僕たちを生かそうとして下さる、この恵み深い、憐れみ深い主人を、わたしたちもまた愛したいと思います。この方が望んでおられること、喜んで下さることを一番に求めて、歩みたいと願います。そして、いつ来られても、喜んでお迎え出来るように、腰に帯を締めて、ともし火をともし、目を覚まして、用意していきたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちの罪の赦しのために、わたしたちを神の子とするために、恵み深い救いのご計画を用意して下さいましたことを感謝いたします。

御子イエスさまが、十字架と復活によって救いを実現して下さい、聖霊が遣わされ、今わたしたちは、イエスさまが再び来られる日、神の国の完成の日を待ち望みつつ歩んでいます。

世の歩みは、苦しみや、誘惑が多く、自分の罪深さ、弱さを覚える日々であります。イエスさまが来られて、すべてに勝利して下さい、心を待ち望みつつ、神の国の完成に希望を抱きつつ、与えられた日々を大切に、精一杯、あなたの御心を求めて歩いていくことが出来ますように。そして、イエスさまがいつ来られても喜んで頂けるような、良き備えをする、目を覚ましている僕となることが出来ますように。

また、一人でも多くの者が、この恵み深い主人を知り、イエスさまにある希望を待ち望む者となり、終わりの日の天の食卓に、共に与ることが出来ますように。

救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン